

持116

702

弓八幡
 鉢木
 羽衣
 道成寺
 竜虎

廿一



始



702
7116



弓八幡 概説

内三十一卷ノ一

一臣下、二月初卯の日男山八幡宮の御神事に参りたるに、錦の袋に桑の弓
を入レ、君に捧げ奉らんとて待ち迎ふる者あり。仔細を問へば、昔桑の弓と蓬
の矢を以て國を治め、嘉例に依り、御代を守らんとの心なりと述べ、眞は我は
此山に年久しく鎮守せる高良の神なりと明してかき消す如くに失せしが、
やゝありて神其姿を現し、舞を舞ひ、君が代をことほぎ、神託の靈驗を示
て失せけり。

此曲ハ協能ノ中ニテモサラリト謡フヲ宜シトス
小書 三段之舞

役別	装束	附	季	所
ワキ勅使	大臣烏帽子(赤上頭掛) 着附厚板 袴袴水 白大口 紋附腰帶		二	山城八宮
ワキツレ 従者二人	大臣烏帽子(黄上頭掛) 着附厚板 赤袴袴水 白大口 紋附腰帶		月	山男郡喜
ツレ男	着附無地袴袴水 白大口 紋附腰帶 扇		曲	山男郡喜
前シテ 尉	面小斗尉 尉髮 着附小格子厚板 茶袴水衣 白大口 蝦子		能	山男郡喜
後シテ 高良神	面郎部 透冠 黒垂 色鉢巻 着附厚板(紅白) 袴袴水		脇	山男郡喜
	白大口 紋附腰帶 神扇		(物)	山男郡喜
			初	山男郡喜
			目	山男郡喜
			春	山男郡喜
			四	山男郡喜
			級	山男郡喜

弓八幡

世阿彌元清作

ワキ勅使
真ツレ二人
拍子合

清代も榮行く男山流代も榮行
く男山名高き神又参らん

そのもそもこれの後字多の院子後

なる後下あり。さそも頃後二月

初拜八幡の由神事あり。野曲

の及びんあれば陪後のに参陪はれ

この宣旨と夢あり。只今八幡山よ
 事宿住り候。道行上サナリヤ。三入。四つの海。波静か
 ある時あれや。波静かある時あれ
 や。八幡の雲もとままりて。げに
 九重の道もから。佳来の旅もゆ
 左かにて。思ふる日影も南なる。八
 幡山よも暮きよけり。八幡山よ

も着きよけり。早舟カカの程よ。

八幡山よ暮きて候。心静かよ神

拜と申さるす。にて候

シテ射二人上柳
 真一セイ
 拍子三合ハズ

神奈川の日も二月の今日とて。や長
 閑けき春の氣色か。花の都
 の空あれや。雲もとままり。風も
 君が代ハの世よ。八千代よ。さ

石の巖となりて苔のむす松
 の葉色も常盤山緑の空も長
 田かきて君安念よ民教く閑の
 戸ざしもさざりま。園よりも君
 を守の神國よ。わさて抱きも澄ぬ
 る夜の月影うみのる清水絶えぬ
 流のままで生けるを放つ大悲

○小謡

の老げよ方程ま。時代かたし神と
 君の道まぐる歩と。運ぶこの山
 の松高き枝も連ある。魁の嶺
 枝も連ある。魁の嶺。曇らぬ時代
 は久方の。所の松の。男山げもさ
 やけき教よまて。君萬歳と祈る
 なる。神よ歩と。運ぶなり。神よ歩と

運ぶあり。今日アノの當社の法ゴ律事シ
とて。糸イトの人多オホクきまマ申マはこれある
糸錦イトニシの袋フクロは入れて持ちたるトら
とんえたり。そも何處ナニトコロより糸イト指サシ
の人ヒトぞシテこれは當社アノは年トシ久キウくクは
申し。君キミ安全アセキとしシ祈イノり申マす者モノあり。
又またこれに持モちたるト糸イトのコらあり。身ミ

の及びあけられしイた奏ソウ聞キ申マす。
又また今イマ糸イトとト待マちえスし。君キミへマ掛カ
げおオしシ有ア難ナンし有ア難ナンし。ままづ
ままづめでたまタマの題タイ目メあり。ささそそそ
のコらとト奏ソウせセよヨとトは。私シは思オモひヒ寄ヨ
りけるケルがもモし又また當社アノの法ゴ律リ宣センか。
分ワきキてテ認ニとトすスべベト。此コれレの御オン

カール上
御手合

言葉とも言えぬものか。あ。今日
は桑宿と待ちえやし。桑のちと
捧げ申す事。即ちこれこそ神慮
あれ。我の上聞け。ふ。早。神の
所代よ。桑のち。邊の矢。て。世と
治め。も。直。あ。所代。の。た。あ。れ。
よ。く。よ。く。奏。入。ま。ま。げ。は。げ。は。
中。タ。コ。ス。ト。早。カ。上。サ。リ。

これの秦平の所代。ま。ま。の。題。れ。
た。り。ま。つ。そ。の。ち。と。取。り。出。す。神。前。
みて。拜。み。申。さ。さ。わ。ら。わ。ら。と。
取。り。出。す。て。の。行。の。は。用。の。あ。ま。ま。と。
昔。唐。土。周。の。代。と。治。め。一。國。の。た。
め。に。の。引。前。を。色。み。干。支。と。治。
め。例。と。以。つ。て。引。と。袋。み。入。れ。
ツ。上。サ。リ。ミ。テ。用。カ。ニ。イ。ダ。カ。上。サ。リ。シ。テ。天。神。ノ。ミ。

八番

シテ

劍と箱又納むるこそ

秦平の源

代の志るしなれ深六柳心それは周の代

これは本朝名も扶桑の國を

引ひぞ上同サラア桑の葉拍子合さるや遠の八岐

山赤切とらるや遠の八岐山拍子合おその海も

ゆたか拍子合あて君の船拍子合臣は瑞穂の玉

ども疎のあ拍子合くあびく草木の恵拍子合

○小謡

も色もあらたある所拍子合神託ぞめ
てたま拍子合神託ぞめ拍子合でたかりける

桑ヨモギのうら遠ヨモギの矢にて世と治め

いそれ高々申しゆへ打合ハカもそも拍子合

箭ハヤを以つて世と治め拍子合始とらつた

人皇の法拍子合作始拍子合まりても即ち當

法拍子合の心拍子合律拍子合か拍子合なり拍子合。然るに神拍子合切拍子合皇拍子合

○サ面独吟
○切是雜子

六ノ八

六

后三韓を鎮め終ひしより同じ
く鷹狩天皇の所聖運に在位も
久し國富み民もゆたかりし後
天が下今に絶えせぬ調とかわ
名下用カニ鉄々進心
上雲上の月卿より下萬民は玉
るまで樂みの聲つきもせず然
りとは申せども君と守の法惠

狩も深きゆゑにより欽明天皇の
所守かきよ。豊前トビの國守佐の郡
蓮臺寺の林ハ幡宮と現れ
八重旗雲とトるべきて洛陽の
南の山高み。雲らぬ法代と守らん
とて石清水いさぎよき靈社と
現れ終へり。されど神代皇后も

八重

用九心

異國退治の御ためは、九州四王寺
の峯において七箇日の清神拜
例も今も之方の天の岩戸の神
遊。羣れ居て謡みや排葉の音
和幣白和幣とくりくりなりし
神霊と移すや神作の跡す
くは。今も道あるまつりごとく。普

一や神籬のたかたまの木の枝
一黄金の鈴と結びつけては
やふる神遊。七百七夜の心神拜真
一。天も初受。地神も感應の海
一。治する所代は立ちかへり。國土
一。守り給みある。八幡三所の神託
ぞめでたかりける。げまや誓も

三ノ八幡

影高き。まげまや。誓も。影高き。と
のま。さらまぎの。神。祭。か。くる。神。慮
ぞ。あり。が。たま。か。秘。ま。千。代。の
声。と。松。尾。の。更。け。行。く。月。の。夜
神。樂。と。奏。り。て。君。と。祈。ら。ん
祈。る。影。も。瑞。垣。の。久。ま。ま。は。り。佐。へ
て。ま。われ。は。眞。は。代。々。と。経。て

地。今。この。年。に。あ。る。ま。で。も。我。れ
と。教。つ。高。良。の。神。と。は。わ。れ。あ
る。が。この。代。と。身。ら。ん。と。只。今
そ。に。あ。り。たり。八。幡。大。菩。薩。の。は
神。託。り。疑。み。あ。と。て。か。ま。清。す
や。う。た。失。せ。ま。け。り。か。ま。清。す。や
ら。に。失。せ。ま。け。り。中。入。間

上ノ山

シ

○ 洋上子 三人待 〇 華子三合光

都に席り神勅と。都は席り神
勅と。悉く奏し上ぐべしと。いんお
ぶも音楽の。聞えて異音。薫すお
りげふあらたある。奇持かあ
ふあらたある。奇持かあ
もとより人も人の國より我が地
念りも我か人と。誓ひの末も
ら

後シテ高良神上ニキテ確カリ
出端 拍子三合光

けき眞如寶相の。概子の。八百萬
作よ。至るまで。動かす絶えず君
守る。高良の。祓と。反我か事なり
ま。さ。ら。ぎ。の。初。卯。の。神。樂。お。も。し。ろ
や。謡。へ。や。謡。へ。日。影。さ。す。り。ま。で
油の白木綿返すも。子代
聲。ぞ。謡。み。と。か。や。神舞 井上打切

二の番

拍子三合

げよやま^{マツ}と^ヒいひな^ヒから^ウら。げよやま^ヒ
 せ^ヒと^ヒいひあ^ガから^カ神^{カミ}の威^イ光^{クワ}の^ヒや^マ
 にか^ドくあ^ラら^タある^シ法^{ホウ}影^{カゲ}向^{ムカ}拜^{イハ}む^コぞ
 貴^キかり^ケける。君^{ミコ}と^シ守^{モリ}の御^{ミコ}惠^メみ。
 も^トと^シより^シ定^サめ^ルあ^ル上^ノよ^クを^トと^シて
 地^チ上^ノ君^{ミコ}の^ミ神^{カミ}德^{トク}天^{テン}下^ゲ一^{イツ}統^{トウ}と^シ守^{モリ}る^{コト}なり
 げ^ヒふ^ヒに^ニ神^{カミ}代^イ今^{イマ}の^ノ代^イの^ノ志^シる^{コト}の^ノ箱^{ハコ}

○仕舞

の^ミ明^{アカ}ら^カよ^ク。この^ノ山^{ヤマ}に^ニ宮^{ミヤ}を^シ居^ルせ^し
 地^チ神^{カミ}の^ノ昔^{ムカシ}の^ノ久^{キウ}方^{ホウ}の^ノ月^{ツキ}の^ノ桂^{ケイ}の^ノ男^ヲ
 山^{ヤマ}さ^ヤや^キけ^キ影^{カゲ}の^ノ所^{トコロ}から^ニ畜^{イク}類^{ルイ}鳥^チ類^{ルイ}
 飛^{トビ}吹^{フク}く^ク松^{マツ}の^ノ風^{カゼ}ま^デも^ト皆^{みな}神^{カミ}體^{テイ}と^シ現^{アハ}
 れ^レげ^レよ^ク頼^{タノ}も^トし^キ神^{カミ}慮^{リョ}示^シ現^{アハ}大^{ダイ}善^{ゼン}
 薩^{サツ}含^{カン}八^{ハチ}幡^{ハン}の^ノ神^{カミ}託^{トク}ぞ^シゆ^タか^ナり^ケる
 神^{カミ}託^{トク}ぞ^シゆ^タか^ナり^ケる。

方八幡

下

鉢木 概説

内三十一卷ノ二

最明寺入道時頼行脚僧に身をやつて廻國の途次、上野國佐野の里を過りけるに、大雪に逢ひければ、一民家に入り、強ひて一宿を求めけり。主人は粟飯を炊きて飢を凌がしめ、又秘藏の鉢木梅、櫻、松を切りて火に焚き、暖を取り、一夜を語り明しけり。時頼主人の氣節に感し、其氏名を問ひて、佐野源左衛門常世なること、并に一族の者共に領地を横奪せられて斯く零落しけることを知りけるが、貧苦の内にも武士の本領を失はずして馬、物具等に心を用ひ、萬一の變に備へ居るを見、深く同情して再會を期し立去りけり。時頼鎌倉に歸りて後、常世の言葉の眞偽を試みん為め、軍兵の臨時召集を行ひけるに、果して其言葉の如くなりければ、大に感し、領地を返し與へたる上鉢木に因みたる三箇の莊をも與へ、常世は面目を施して本領に安堵しけり。

此曲九番習ノ内ニシテ位心持等充分ニ工夫シテ謡フベシ殊ニ詞ノ工合篤ト考フベシ

後シテ	ワキツレ	後ワキ	前シテ	前ワキ	ツレ	役別
佐野源三門 常世	二階堂某	北條時頼	佐野源左門 常世	北條時頼	常世ノ妻	
白鉢巻 着附袷半目 長刀 鞭	着附厚板 側次 腰帶 小刀 太刀持	金入角帽子(沙門ニ着) 着附白綾 水晶數珠 文袋中 水衣 白大口 腰帶 小刀	着附袷半目 素袍上下 小刀 鏡ノ扇	角帽子 着附無地袷半目 水衣 腰帶 扇子 扇指ニ 數珠持 笠着	面深井 髪 無色髮帶 着附摺箔 無色厚板着流シ	装束附
目番二器 目番四	曲柄	月二十	李			
習 番 九	替古順	村野庄 郡馬郡國野上ノ前 倉 鎌 岡 模 桐 伎	所			

鉢木

觀阿彌清次作

ワキ僧
次才上
拍子ニ合
ヨワク

行方定ぬ道なれば行方定ぬ
道あれど来し方もいつくならま
れ一處不任の沙門みてゆ
われこの程の修儀の國にひびか
餘りに雪深くありの程よまつて
の度々録念にぶり。春よあり修行

に出でてぞやし思ひぬ道行上 信濃ある
 俵向の嶽よ立つ煙霧 俵向の嶽よ
 立つ煙遠近人の袖寒く吹くや
 鼠の犬井山捨つる身にト 鳥ま伴の
元 里の甲 入元 ぞ憂カ 世と離れ坂墨の
 夜元 の碓氷川下す筏の板鼻や
 佐野元 のわたりにト 急カ ま元 けりト 佐

野元 のわたりにト 急カ ま元 けりト 急カ ま
 小野よ上野の國カ 佐野のわたりに
 急カ ま元 いてト あら笑止セ やシ 又ユ 雪キ の降
 りありてト け處カ 又宿と借らばや
 と思ひぬ元 いかカ 此の屋の内カ 案内
 申しぬト 誰ツ ぞシ わたりぬカ ぞト 引カ れぬ
 修行者シ にてト 一夜カ の宿と御カ 貸し

此へツレサテ易ヤサシクに御事にてふも主の
 御留守にてオシの程よ。お宿は適カタひ
 のまフキらば御帰オシりまでこれ
 に侍ち中さうずるにてツレサテの
 ともかくもにてオシわらわ外ソト面オモ出イで
 迎ムカひ。その由とやまをオシやと思オモひオシ
シテ常世お降オシつたる雪かオシないかオシに世オシある
御ハテ用カニ
オシ

人の面白うサシ候カらん。それ雪ユキは鶴ツル
 毛マウに似ニてオシ花ハナてオシ敷シ乱ランし。人の鶴ツル毛マウ
 と著オシて立タつてオシ排ハ徊クイすオシことオシいオシつり。
先ヲカされオシば今イマ降オシる雪ユキも。もとオシるオシ雪ユキ
 みのオシかオシをオシらオシぬオシも。われオシの鶴ツル毛マウと著オシ
 て立タつてオシ排ハ徊クイすオシまオシ袂タビもオシ拵オシらオシて
 袖スエせオシまオシ。細ホソ布フ衣イ陸リク奥ウチのオシ。今イマ日ヒの
カニル上ツツク用カニ
オシ

寒き事をいかにせん。あら面白からん
 の雪の日やああら思ひよらずや
 この大雪に何とてこれよ佇みて
 御入りゆぞ 式し修好者の御入
 り候が一夜の宿と作せし程よ御
 留守の由申ししてゆへ。御席り
 まで御侍ちあらうずる由作せん

程よ。これまで集りてふ 式してそ
 の修好者らつづくにわたりのぞ
 あれよ御入りの われらが事には
 てゆまた日の高くゆへども。餘りの
 大雪にて前後と忘ドてゆ程に
 一夜の宿と御貸しゆへ 易き御
 事にてゆへども。餘りにん苦しくゆ

程よ。お宿の適カタひゆまじワキカヤチらむらむ
 見ミ苦ガム一ヒトき返ヘ苦ガム一ヒトからぬ事コトにてゆ。
 ひらヒラ一ヒト夜ヤと御ミ貸カ一ヒトへシテ押ヘテとめやし
 たくはゆトクハユともトモ。われワレらまマ婦メき人ヒト任ニ
 みかぬたミカヌタるル躰テイまマてゆ程ハダよ。なナかあアか
 宿ヤドの思オモひヒもモよヨらぬ事コトにてゆ。ヒラカ
 れレよりリ十八ジヤウハチ町チヨウあアたタよヨ山ヤマ本ホンの里サト

とトてテよヨまマ泊トマりのゆ。日ヒの暮ユスれぬ
 さサとトよヨ一ヒト早ハヤくク御ミ出デてテゆへヘ
ワキ少し強メニとトてテの志シかカしお貸カ一ヒトあるまマじジいイよ
 てテ依ヨかカ御ミ痛イタまマくクのあアトトゆへ
 ともトモ。お宿ヤドのまマらラせセたタゆユ ワキ確カリあアら
 曲マコトもモあアやヤゆユ一ヒトなナまマいイとト侍サマちチやし
 てテゆユものモノかカなナ ツレ上ササリあアまマ一ヒトやヤわワねネら

かやうに暮みるも。前母の戒は松
 子ゆゑなり。せめてわかちうの人よ
 値遇ししてこそ後の母のたより
 ともあふべけれ。然るべくは御宿
 をまらさせ給ひゆへ。おやうに
 思しめさぶ。行きて以前にゆきりゆ
 ともぬぞ。いやはこの大雪に遠く風

御出でゆま。某追つまらぬ
 中しゆべ。なまらあう旅人お宿
 ちまらせうあう。餘りの大雪に中
 す事も聞えぬげふゆ。痛つしの
 御右様やあもと降る雪に道
 を忘れ。今あるまら行くま方を
 失ひ一断。又佇みて。袖ある雪を

心持ヲ付ケ

うらち拂ひハうらち拂ひハ旅ノ氣色。
カハル上ノ用カミ古歌ノ心ニ似タるゾや。駒ヲめテ。
心袖ウらちハ拂フかケもナらズ佐野ノ
わたりノ雪ノ暮カやウに詠
み。突ノ和路や。三ノ輪ガ崎アる。佐
野ノ渡リカ。東ノ路ノ佐野ノ
の。わ。た。り。の。雪。の。暮。は。迷。ひ。つ。か

○小謡

れ。絵。を。ん。よ。り。苦。く。へ。ど。一。夜。
甲は。は。り。旅。へ。や。ち。げ。は。は。も。旅。の。
心宿。げ。よ。こ。れ。も。旅。の。宿。か。り。そ。め
あ。が。ら。旅。遇。の。縁。一。樹。の。陰。の。や。ど
り。も。こ。の。世。あ。ら。ぬ。契。な。り。そ。れ。の
雨。の。木。陰。こ。れ。の。雪。の。軒。あ。り。て。
憂。ま。の。寝。あ。が。ら。の。草。枕。夢。よ。り

霜や結ぶらん夢より霜や結ぶらん。
霜フユや結ユヅルぶらん夢ユメより霜フユや結ユヅルぶらん。

てゆども。行はくもゆへ集らせう

ずるものもななくゆはいかよ

ツツサカをりあーこれに粟の飯のゆ程に。

若くからずゆ集らせられゆへ

シテウエチこらば其の使申しゆべー。カハカハ

ゆ。お宿とご集らせてゆども。

行みても集らせうずるものも

あくゆとくりあーこれよ粟の飯の

あるよしやし候。若くからずゆ聞

しめされゆへ。ワキ田カニ心持ラウチこれこそ日本一の事

にてゆ賜りゆへ。ミテ田カニなう聞ーめさ

れうずると作せゆ。急らで集らせ

せられぬへ ツレサラク 心得 シテ 静カニ張ラテ したる 總じて

この粟とやすものぬ 古世にあり

一時は歌よ詠み待 に作りたる

とこそ承りてぬ 今ぬこの粟と

以つて身命 とつぎぬげはや 廬生

かゝる栄華の夢 の五十年 其の

邯鄲の假枕 一睡の夢 の夢 の夢

も粟飯 かゝる 程ぞ かり あされや

げにわれも うらも 寝て 夢にも

昔と あらば 慰む 事 もある

べ に なる は 病 せ ぬ か ほど まで

倒 み つか れたる 故郷 の 松風 寒

よ 夜 も す くら 寝 ら れ ぬ 夢 も

忍 び 行 思 ひ 出 の 有 る ま 夜 の

月中 カテ 拍子合

カレ上

最も抑へ

光ヲカへ

締メル心

シテ 拍子合

更くろるついでに次第に寒くあり
 の行とがな火は焚いてあて集
 らせるま^らや思ひ出だした事^らのゆ
 鉢の木と持ちてゆこれと切り火
 に焚いてあてやし^{ワケ}げふ
 げふ鉢の木のゆ^{ミテ}んが某
 妻にありし時は鉢の木に好き

数多^{アマ}木と集め持ちてゆ^モひとが
 やうの躰に罷り^{マカ}なりや^イ木
 好きも^ズ無用と^ナる^ト管人^{ツネ}に集ら
 せてゆ^コりあ^カら^ラ今も梅桜松
 と持ち^テて^ルゆ^ハあ^ハの^ハ持^シた^ル木
 いてゆ^ハ某^カ秘^シる^コゆ^ハ今
 夜のおもてあ^ハは^レこれと火に焚^キ

心あててやさうするはての^{ワキ用カニ}わ
 いやこれは何思ひもよらぬ事にて
 御志^{コトシ}は者難う依へとも。自然
 又おこと世に出で終えん時の御
 愁^{ナクサミ}はての向。なかなか思ひもよら
 ずの^{シテカケテ運ヒノミ}いやさてもこの身は埋^{ウケル}木
 の^{ハナ}花咲く世にあたらん事。今この

○獨吟

身^{ツレカル上サラリ}あそは逢ひがた^{拍子合}り
 なる鉢の木と。御身のたぬま焚^{ヒキ}く
 あらば^{シテ用カニ}これぞ真^{マコト}に難^{ノリ}行の法の
 薪^{タキ}と思しめせ^{ツレ上サラリ}かもこの程
 雪降りて^{シテ用カニ}仙人^{ツカ}にははへし^{ヒツ}電山^{ヒツ}
 の薪^{タキ}かくこそ^ツあらぬ^{シテ}われも
 身と^{拍子合}捨て^{ハナカニ運ヒコク}人のたぬの鉢^ツの木切^キ

くるも、や惜しからどと。
 うち拵ひて見れば面白やいか
 せん。まづ冬木より咲きそむる窓
 の梅の北面の電封して寒きよ
 も。異木よりまづさきのたては梅
 を切りやそむべき。と人
 こそ憂けれ山道の折りかけ垣の

梅とだに惜しと惜みし。
 ら新よあすべいとかねて思ひま
 や。樹と見れば春ごとに花あし
 遅ければこの木や他ふし心と
 盡く育てし。今はわれのみ
 他びてすま。家梅切りくべてひび
 くらにあそび。ま

○小謡
古松の平末
煙を新と
あも理のや

キーもげよ枝をたぬ糸とすかし
てかくりあれと植ゑ墨きしその
かひ今は尻吹く。松はもとより
常磐にて薪とあるの梅摘切り
くべて今ぞ清垣守衛士の林火
火のあたぬありよくありてあた
り絵へや 巡頂よきの火にあたり

寒さぞと忘れぬ 街出てはより
われらも火にあたりてぬ
申しぬ主のほ苗字とば行とやし
ゆぞ承りたくなぬ いや葉の苗字も
あまの者にてぬ 行と作せぬとも
常人とはんえ給はずぬ自然の
時の為にてぬ 竹の苔うぬべま

山一

山一

此苗字と承りゆべー ^{シテウケテ} 此の上は
 行とカ色 ^{ツツ} 及び ^{確カリ} 此こそ佐野の
 係左衛門の尉常世があれ果
 にて ^{ワキカシメサアリ} 此れ ^{確カリ} 行とて ^{シテ用カ} 此の
 さまの體 ^{テイ} あり給ひて佐
 其の事 ^{シテ用カ} にて ^{確カリ} 一族 ^{ロイチ} どもに ^{シテ用カ} 横領 ^{ワウ} せら
 れて ^{ワキカシメ} 此の身 ^{シテ用カ} となりて ^{ワキカシメ} 此の

それは行とて ^{シテ用カ} 鎌倉へ御上りのひて。
 其の ^運 由 ^{シテ用カ} 法 ^{シテ用カ} は ^運 此 ^運 の ^運 盡 ^運 くる
 所 ^運 の ^運 最 ^運 明 ^運 寺 ^運 殿 ^運 入 ^運 修 ^運 行 ^運 子 ^運 御 ^運 出 ^運 て
 此 ^運 上 ^運 の ^運 此 ^運 行 ^運 と ^運 お ^運 ち ^運 此 ^運 れ ^運 て ^運 此 ^運 へ ^運 ども。
 此 ^運 傍 ^運 の ^運 此 ^運 へ ^運 此 ^運 れ ^運 子 ^運 武 ^運 具 ^運 一 ^運 領 ^運 薙 ^運 刀 ^運 一 ^運 え ^運 た。
 又 ^運 此 ^運 れ ^運 子 ^運 馬 ^運 ども ^運 一 ^運 匹 ^運 つ ^運 お ^運 い ^運 て ^運 持 ^運 ち ^運 て
 此 ^運 此 ^運 の ^運 此 ^運 今 ^運 に ^運 ても ^運 此 ^運 れ ^運 鎌 ^運 倉 ^運 に

本

書

御大事あらば。ちぎれたりとも

この具足取つて投げかけさびたり

とも籙刀と持ち。瘦せたりとも

あの馬に乗り。一番に馳せまじ著

到につまひさして合戦さうまらば

敵大勢ありとも。敵大勢ありとも

ても。一番は破つて入り思ひ敵より

あひ打ちあひひて死あんこの身の
このまあらば後らに飢まつかれ
て死あん命あんほう無念の
事さうぞや身のかくても
たてた頼めわれ世の中は
あらんほご又こそまはりゆはめ
眼をじて出づるあり

一の御事や。とめはつむ我
 が宿の。さもる。昔くへど。暫
 のとまり。終へや。留る。名残のま
 ま。あらば。さそ。いくたび。かき。日
 の。空。透え。寒。ま。この。暮。に
 いづく。に。宿。を。持。衣。け。み。を。かり
 留。り。終。へ。や。名。残。の。宿。よ。と。ま。れ

ども。暇。して。御。出。で。か。お。ら。は
 よ。常。々。又。お。入。り。自。然。鎌。倉。に
 御。上。り。あ。ら。ば。お。尋。ね。あ。れ。希。有
 なる。法。師。あ。り。か。ひ。か。ひ。く。の。お
 け。れ。ども。披。露。の。縁。に。あ。り。や。さ。ん
 ば。伊。佐。捨。て。ま。せ。終。み。あ。ら。ん。云。ひ。捨
 て。出。で。舟。の。と。も。に。名。残。や。惜。む

らんともにて名残イノや惜ウレむらん 三中人早鼓

後シテ常世上ツヨクカシテサラリ
一ツヨク声ヨリ
早ツヨク笛
拍ツヨク子ツヨク合ツヨクハス

いかたあれある旅人タビト鎌倉カマクラへ勢セウ方の
よきこいふの真マコトが行ユク夥オホシしくよる

さぞあるらん東トウへ首カ國クニの大名

小名思シひ思シひの鎌倉カマクラ入りイリ。さぞ

見事ミセにてゆらん白金シラガネ物打モノウチつたる

糸毛イトモの具足グソクにへ金銀キンギンをのべたるた

刀チ刀カタ飼カひは飼カうたる馬ウマに業ノり。

業ノ替カ目メ中ナカ向ムカまらびやかヤカはうウちチ連ツれ

うち連ツれよるヨルはかりハカリは常サマ世ヨが常サマに

業ノりたる馬ウマ物具モノグや打物ウチモノの物モノそ

の物モノよあらさるサル氣色キシキさぞ笑ウツみ

らんランさりサリあアからカラ取ツぬヌ誰ナニにもニモあ

るルまマじジしシ心ココロだダかりカリは勇ユウめメどもドモ勇ユウ

みかねたる瘦せ馬のあら道おそ
 や^上急げども^急急げども^急弱ま
 に弱ま^新折の糸の^用おれはすれ
 たる瘦せ馬あれは^サお打てどもあみ
 れどもさき入は進まぬ是弱車の
 系^リガあけ^れをおひかけたり
 いか^に誰かある^御前^にの^國々

後平時頼河朗

の軍勢がともは皆えあがりてある
 か^早せん^の悉く^集りて^ハ其の
 徳軍勢の中^にいかにもちぎられ
 たる具足と著^まびたる^籠刀と
 持ち^し瘦せたる^馬と自身ひかへ
 たる武士一^騎あるべし^急いで
 此方へあれとやし^ハ長^つて^ハ

いかに難かある^{狂言} 御前よの^{狂言} 君よ
 りの御後よの^{狂言} 法軍勢の中は
 ちぎられたる具足と著さびたる
 籬刀と持ちち。瘦せる馬と自身ひ
 かくたる武者あるべし。急いで素
 ねて御前へまねたるの御事にては
^{狂言} 母つていかに申ししは^{狂言} 行つて

ゆぞ^{狂言} 急いで御前へ御参りゆへ
^{狂言} 行くと果は御前へまねたるや^{狂言} なか
 なかの事^{狂言} あら思ひよらすや
 定めて人たがへめてゆべし^{狂言} いか
 いや其方の事にては其の子細の
 法軍勢の中はいかにも見苦し
 き武者と連れられてまねたるの御

事にてはか。んや。せば其方ほど
 見苦しき武者もひのぬれよさ
 てやしひ急いで御参りひ入
 行したるへ。法軍勢の中にかよ
 も見苦しき武者に集れとひや
 なかあかの事。コレては某が事
 にてゆべ。長つたると御申しひ入

狂言

狂言

シテ確カリ

心得申しひ。げよげにこれも心
 得たり。某が敵人謀叛人と申し
 上げ。法前よる。もたされ頭をも割
 ねられんためあ。よ。し。それも
 かあり。い。て。は。前。よ。集。ら。ん。と。
 大床ふ。て。る。後。せ。バ。今。度。の。早
 打。よ。今。度。の。早。打。よ。ど。り。集。る

カハル上
オホキク
オホキク
オホキク

月大キク
オホキク

サワリ
オホキク

オホキク

オホキク

兵ツバシまハらハ星ホシの元ゆニくト並ナみサ所トたりタ。さハて元流リ前ゼンよハの元侍シ。其ノの元教キョウ人ジン並ナみサ右ミつツ。目メと元引ヒきム指ユビと元さス。笑ウラひハあハるス。その元中ナカに元横ヨコ縫ヌイの元ちチぶハれたル。古コ腹ハラ巻マキはハびビ。籬シ刀タ。やヤうウに元横ヨコたタへハわハるル。びビれレたタるル。氣キ色シキもモあハくク。幸コウりリて元流リ前ゼンよハ畏オソるル。

ワキ月カッテ大キク確カリ

やあいかよあれあるの佐野の源左衛門の尉常世がこれこそいつぞやの大空に宿借りし修行者よんん忘れてあるから。そでぬ佐野はてやせよな。今にてもあれ鎌倉に御大事もあらばちぎれたりともその具足取つて投げ懸け。

本下

三三

さびたりともその籠刀をもち。
 瘦せたりともあ張ツテの馬に乗り。一番
 に馳せ来るべきよし申しつる。詞の
 末を違へずして孫ク来りたるこそ
 神妙あれ元ヲカハまつ今度の勢
 つかひ全く餘の儀ギもあらば常世
 が詞の末。真マコトか偽イツハクか知らん為あり。

元ヲカハ又當業の人も初シ松マツあらシ申す
 べし。理ツ非ヒよシつて其の母法ハフは
 すべき計ハカリありキまつカニまつカニ計法ハフの
 じめにの常世トコヨが本領ホンリョウ佐野サノの庄シヤ三
 十餘トウジユ郷カウ返ヘリしテ興キョウある計ハカリありキ又マタ何
 ちりも切セツありキしテはハ大オホを降ノゾつて寒サム
 かりしは秘ヒ発ハツせし鉢ハチの木キと切キり。

火に焚きあてし志とばらつこの世
 にかつ忘るべきにして其の時の鏗
 の木の梅搦松ありしよあそ
 の返報も加賀に梅田越中に梅
 井上野に松井田合せて三箇の
 庄の孫々にあるまで相違あら
 ざる自筆の状安堵に取りそ賜

びけれバ^{用カニ朗カニ}常世はこれと賜りて常
 世のこれを賜りて之度頂戴はり
 これん孫やんがよはれめ笑ひし
 とも^サからもこれ孫のハ氣色さぞ
 羨^{ウラヤミ}かるらん^{先ヲカサテリ}さそて國々の徳軍勢
 皆御暇賜り故郷へとてぞ席り
 ける^ヤ其の中^{ニテ中}に常世^ハその中^{ニテ}に常

本人

11月

世の喜びの眉を閉ざしつゝ今こそ勇
 女のこの馬に立ち乗せて上野や佐
 野の舟橋取り放れよ。本領よ
 安堵して席をぞ嬉しかりける
 ぞ嬉しかりける

羽衣 概説

内二十一卷ノ三

白龍と云へる漁夫三保の松原にて美しき衣の松の枝に懸れるを見出し、取りて
 歸らんとすれば美しき女現はれ、其の衣は天人の羽衣とて人間に與ふべき
 物に非ざれば返して給へと云ふ、白龍惜みて返さず、羽衣無くては天上に歸る
 事叶はずとて天人太く悲しめるより、白龍憐れに思ひ、舞を舞ひ給はば
 返して申さんと云ふ衣無くては舞ふ事叶はずと云ふより、返して與ふれば天
 人は之れを身に纏ひ、東遊の曲の數々舞ひ奏でつゝ昇天せり。

此ノ曲始々ハ抑ヘテ謡フ所アレド餘ハ伸々ト河エテ謡フヲ宜シトス
 小書 和合舞 彩色之傳

シ テ 天 人	ワ キ ツ レ 人 漁 夫	ワ キ 漁 夫 白 龍	役 別
面 増 天 冠 鬘 髮 女 飾 髻 髮 帶 着 附 摺 箔 赤 地 縫 箔 腰 卷 桐 箔 腰 帶 襟 白 二 天 女 扇 持 後 三 物 着 紫 長 絹 着	着 附 無 地 鬘 斗 目 釣 竿 持	着 附 段 鬘 斗 目 水 衣 白 大 口 腰 帶 扇 釣 竿 持	装 束 附
目 番 三 (物 葛)	曲 柄 替 古 順	月 三	季
級 四		原 松 保 三 部 部 安 國 可 駿	所

羽衣

世阿彌元清作

早漁夫上
 早シニ入一
 拍子合ハス
 風早の三徳の浦曲と傳ぐ船の
 浦人騒ぐ。彼路カある。引れ三保
 の松原に白龍と申す漁夫ありて
 此ノ方里の好山又雲忽ち又起り。
 一樓の明月に雨始めて晴れり。
 げに長閑かある時。もや。雲の

けーき松原の浪立ちつづく朝
 震月も疎りの天の息及びあま
 身の剛みも心そらあゝる氣色しあ
 忘れぬや山路をと分けてまよ見
 傳遙かよ三保の松原よ立ちつ
 れいよや通ん立ちつれいざわ
 通ん風むかひ雲のうき波た

つとスつて雲のうき波たちと見
 て釣せて人や帰るらん待て暫
 いはるならぶ後くものどけき朝
 風の松の常盤の聲身ぞかり彼の音
 あま朝あまぎよ釣り人多き小舟
 かの釣り人多き小舟かあわれ
 三保の松原よより浦の景色を

眺むる所に。虚空は花降りし音楽
聞え霊音四方は薫ずこれた事
と思ひぬ所ふこれある松よ暮
き夜懸れり。等りて見れり色香
妙なりて常の夜ふあらす。如す
さま取りて降り古き人おもてせ
家の寶とあさざわとぬる

シテ女 浮キヤカニサリ

呼

あう其の夜の洗方のはてゆ行
みるされゆぞ 引れぬ捨ひたる夜

シテ用カニ

にてゆ程は取りて歸りゆ
引れぬ夫人の羽衣とてだわす

人間は其まへま物又あらすもその

如くは還ま終へ 引れぬこの夜の

御主とらふとては夫人あてしま

すむかむか。さめあらば。来世の壽持。又
 留め置ま。國の寶とあすべま。あ
 り。夜と返す事あるま。悲し
 やあ羽衣あくつ。の飛行の道も絶
 え。天上へ帰らん事も。叶あま。ど。
 進心
 さり。さ。返返。たび。終入
 この御詞と聞くより。も。い。ふ。よ。
 フキカニルサアリ
 ヨク
 拍子合ハズ

白龍カと得固より。この身の心あ
 ま。天の羽衣さ。り。かく。か。あ。ま。じ
 きて。立ち。の。ひ。ば。今。今。あ。が。ら
 天人も。羽。あ。ま。鳥。の。あ。く。は。て。上
 らん。と。ま。れ。の。衣。あ。地。又。又。信。あ
 べ。下。界。あ。り。わ。あ。ら。ん。か。く。わ
 あ。ら。ん。と。悲。あ。と。白龍衣を返す
 フキサアリ
 フキカニルサアリ
 シテ抑ハテ
 シテ抑ハテ
 カル上
 アガ

ねバ シテ 飛 カ 及 カ ます テ ず カ せん カ 方も ロ

上月 雨カミシツリ
拍子三合

涙 ル の カ 露 カ の カ た カ ま カ ず カ ら カ ず カ ら カ ぎ カ しの カ 花 カ も カ

し カ と カ し カ と カ と カ 天 カ 人の カ の カ 五 カ 表 カ も カ 目 カ の カ

前 カ に カ 見 カ え カ て カ 清 カ ま カ じ カ や カ 天 カ の カ 息 カ

あり カ さ カ け カ ん カ れ カ の カ 震 カ た カ つ カ 雲 カ 路 カ 惑 カ

ひ カ て カ 行 カ 方 カ 知 カ ら カ ず カ も カ 住 カ み カ 馴 カ れ カ

空 カ 又 カ い カ つ カ 行 カ く カ 雲 カ の カ う カ ら カ ね カ ま カ し カ

○小謡

ま カ け カ ー カ ま カ の カ 途 カ 陵 カ 頻 カ 依 カ の カ 馴 カ れ カ

な カ れ カ し カ の カ 途 カ 陵 カ 頻 カ 依 カ の カ 馴 カ れ カ あ カ れ カ し カ 聲 カ

今 カ 更 カ に カ 僅 カ か カ ある カ の カ 雁 カ の カ 啼 カ り カ 行く カ 天 カ

踏 カ と カ 圓 カ け カ ば カ あ カ つ カ かり カ や カ 千 カ 鳥 カ 踏 カ の カ

仲 カ つ カ 彼 カ 行 カ く カ かり カ 帰 カ る カ 雲 カ 片 カ の カ 空 カ

又 カ 吹 カ く カ ま カ ぞ カ あ カ り カ かり カ や カ 空 カ 又 カ 吹 カ く カ ま カ

ま カ ぞ カ あ カ り カ かり カ や カ い カ かに カ 中 カ し カ の カ 姿 カ

ことごとく奪れの餘り又御痛のりくゆ
 移よ。夜と返りし中さうするにての
シテカケテサテリ
 あら焼しやけ方へ給りゆへシテカケテ抑ヘテ暫く。
 承り及びたる天人の舞樂。只今
 こゝまで奏し給りぬ。夜と返りし中
シテササランニ
 すべし。焼しやこそての天よよの瑞
 らし事とえたり。この悦びよとそ

もさうらづ人回の御遊の形見の
 舞。月宮と由らす舞曲あり。只
 今さうにて奏しつゝ。世の憂き人
 又傳ふべし。さうあから夜あくての
連ンデ
 けみま。さうさうはまづ返り給へ
ワササ
 いわこの夜と返りあへ舞曲とあ
 さい。そのまゝ。さうあやうり給み

ま ^{シテカシ} い ^{ウタガヒ} や ^ハ 疑 ^ニ の ^ハ 人 ^ニ 向 ^{ガシ} る ^ニ あり。天 ^ニ も ^{シテ} 疑 ^ハ あり。あ ^ハ き ^ニ も ^ハ の ^ト と ^ハ 射 ^ニ ち ^カ げ ^ニ たり。あ ^ハ き ^ニ も ^ハ の ^ト と ^ハ 射 ^ニ ち ^カ げ ^ニ たり。

ま ^{シテ} ぎ ^ニ て ^ハ 羽 ^ニ 衣 ^ト と ^ハ 返 ^シ へ ^ニ 興 ^ニ ず ^レ ば ^ハ 物 ^ニ 着 ^ス 。

ひ ^{シテ} 女 ^ニ の ^ハ 衣 ^ト と ^ハ 美 ^ク し ^ツ 。

曲 ^{キョク} と ^ハ 天 ^ノ の ^ハ 羽 ^ニ 衣 ^ト 凡 ^ニ 舞 ^ヒ 。

雨 ^{アメ} は ^ハ 雨 ^ニ 花 ^ニ の ^ハ 袖 ^ニ 曲 ^{キョク} と ^ハ 奏 ^ス 。

東 ^{トウ} 遊 ^{ユウ} の ^ハ 駿 ^{セン} 河 ^カ 舞 ^ヒ 車 ^{クルマ} 遊 ^{ユウ} の ^ハ 駿 ^{セン} 。

○サシ曲独吟
○サシ切送
○サシ切送
○サシ切送

何 ^{ナニ} 舞 ^ヒ け ^レ の ^ハ 時 ^{トキ} や ^ハ 初 ^{ハジメ} あり ^ラ 。

久 ^{キウ} 方 ^{ホウ} の ^ハ 天 ^ノ と ^ハ い ^フ 。

空 ^{ソラ} の ^ハ 限 ^リ も ^ハ あ ^リ 。

久 ^{キウ} 方 ^{ホウ} の ^ハ 空 ^ノ と ^ハ は ^ハ 名 ^ナ づ ^ケ 。

月 ^{ツキ} 宮 ^{ミヤ} 殿 ^{テン} の ^ハ 有 ^ア 様 ^{サマ} 。

白 ^{シロ} 衣 ^{ユイ} 黒 ^{クロ} 衣 ^{ユイ} の ^ハ 天 ^ノ 。

人 ^{ヒト} の ^ハ 数 ^{カズ} と ^ハ 五 ^{イチ} と ^ハ 分 ^{ワケ} 。

○仕舞

天^ゴ乙^ニ女^ニ奉^ホ仕^シと^ト定^サめ^メ役^セと^トあ^ハす^ハわ^レれ
 も^モ数^カあ^ル天^ニ乙^ニ女^ニ月^ノ桂^ノ身^ヲと^トわ^レ
 けて^ケて^テ假^カ子^リ東^マの^ノ駿^ス河^カ洋^ヲ世^ニ傳^ハへ
 たる^タ曲^クと^トか^ハわ^カる^ル春^ノ志^ヲる^ルか^ハわ^カる^ル
 久^ク方^ハの^ノ月^ノ桂^ノ花^ハや^ハ咲^クけ^レに
 花^ハか^ハつ^ラら^キめ^クハ^ハ春^ノ志^ヲる^ルか^ハわ^カる^ル
 面^オ白^シや^ハ天^ノあ^らら^でて^モも^モ妙^ナり^テ天^ノ

つ^ツ凡^ソ雲^ノの^ノ通^ヒ路^ハ吹^キま^いら^るふ^シ女^ノ
 の^ノ姿^ハ暫^シ留^りて^モこの^ノ松^原の^ノ雲^ノ
 の^ノ色^ハと^ト三^條が^ハ崎^月清^見富^士
 の^ノ雪^ハい^つれ^や雲^のあ^けほ^の類^ハ
 み^も松^原も^も長^閑か^ある^浦の^有根^ハ
 其^ノ上^ハ天^地の^行と^隔て^ん玉^垣の^切
 内^外の^非の^清来^て月^も曇^らぬ

日の本や君が代わ天の羽衣まれふ
 きて撫つとも盡きぬ巖ぞと聞
 くも妙あり東歌聲添て数々の
 笙笛琴篳篥候孤雲の外は元ら
 満ちて落日のくれあみハ蘇合路
 の山とらうらして緑は彼は浮鴻か
 たらふ巖は花降りてあげは雪と

包す白雲の袖ぞ妙ある。

シテ中 用カニ
 拍子三合ハス
 太鼓声合
 南無舞 命月天子 本地大勢至

上向
 東遊の舞の曲 序之舞

シテワカ 用カニ 朗カニ
 或は天つ清空の緑の衣 又は喜立
 つ霞の衣 色香も妙あり乙女の裳
 下向 用カニ 朗カニ
 左右左さゆさゆさの花とかが
 の天の羽袖靡くも返すも舞のそて

破之舞
 上打邊

上キリ

○獨坐は舞

東遊の教々よ。東遊の教々よ。其の
 名も月のいり入の三五夜中の空
 に。満月真如の歌とあり。亦乾圓
 満は去成就七寶充滿の寶と降し
 國去よこれと施し給みさるるまどて
 時移つて。天の羽衣浦風子棚引ま
 たあひく。三保の松原浮嶋が雲の

上、えん

愛鷹山や富士の高嶺がすかた
 ありて。天つ赤空の霞はまぎれて
 失せたりけり。

目次

終

道成寺 概説

内三十一卷ノ四

紀州日高の道成寺にて鐘の供養を行ひけるに、一人の白拍子來り、切に請ひ舞を舞ふことを約して供養の場に入るを許されけり。白拍子大に喜び、立ち舞ふ態を装ひつ、鐘中に飛入りけるに、鐘は轟然として落下しけり。能力愕きて事の由を住僧に告げると、住僧語らやう、昔此地にまたこの庄司といへるがあり、其娘熊野參詣の山伏に戀慕しけるが、山伏の避けて逢はざりけるを怨み迹を追ひて日高川に到り、遂に一念毒蛇となりて此寺に入り、山伏の潜める鐘を纏ひて之を取殺しけりとして、衆僧と共に鐘に向ひ、祈念を籠めけるに、鐘は本如くに上り、内より蛇體出現して鐘を怨みけるが、祈り祈られ、日高川に飛入りて失せけり。

小書 赤頭 五段舞 中段数廻 無廻崩

後シテ	シテ	ワキツレ	ワキ	役	装束	附	季	所
				別				
蛇體 (攝ナシ)	白拍子	從僧二人	道成寺住僧		金緞角帽子 着附白厚板 白大口 茶水衣 白腰帶 刺高数珠 扇		三	紀伊大寺 伊生 高道 高日 高日 高日 高日
	面花深井 長鬘 鱗鬘帶 着附白地鱗箔 黒地鱗紋腰卷 鱗腰帶 赤地唐織坪折 鬼扇 物着前折烏帽子着心	綴子角帽子 着附無地熨斗目 白大口 茶水衣 綴子腰帶 刺高数珠 扇					月	高日 高日 高日 高日 高日
	面半蛇 前ノ坪折ノ腕ノ腰巻 打杖						四	高日 高日 高日 高日 高日
							目	高日 高日 高日 高日 高日
							傳	高日 高日 高日 高日 高日

道成寺

觀阿彌清次作

ワキ僧河

これは紀州道成寺の住僧にて
 俗にさても當寺においてさるる子
 細あつて久しく撞鐘退轉仕
 りてゆくとこの程再興ノ鐘と鑄
 させてゆ。今日吉日にてゆ程に鐘
 の供養と致さばやとぬいひか

に能力。さや鐘とて鐘樓へ上げて
 あるか 狂言 さんゆはや鐘樓へ上げて
 今 ワキ 今日鐘の供養と致さ
 うするにてあるそ。又さる子細ある間。
 女人禁制にてそがまひて一人も入れ
 ぬあ。その分心得ゆへ 狂言 畏つてゆ
 作 シテ女次郎上 りー罪も消えぬへ ト 作 ト

罪も消えぬへ。鐘の供養に集
 らん ト サシ上 されこの國の傍に住む白
 拍子にてゆ ト さても道成寺と申す
 御寺も鐘の供養の出入りゆよし申
 しゆ程に。只今来らそやと思ひゆ ト カ
 月 ト へ程あくる ト 月 ト へ程あくる
 夕 ト の煙満ち来る。小松息 ト 忍く心

かまた暮れぬ。日高の寺に暮まて
けり。日高の寺に暮まてけり。
急まの程に。日高の寺に暮まてけり。
やかて供養と拜まうするにて。中ミナ狂言
これこの國の傍に住む白拍子に
ゆ。鐘の供養にそと拜とまひゆへし。
供養と拜ませしてたまはけりゆへ狂言

あら焼しや。渡を舞とまひゆへし物着
焼しや。さらの舞はんとして。あれは
まゝます。宮人の鳥帽子と一も
一假に暮て。すては拍子と進め
けり。花の外に松をかり。花の外に
松をかり。暮れそめて。鐘や響くらん乱拍子
道成の御うけたまはけり。始めて伽藍ガラン

たちにはまの道成興業の寺あれ
 ともて道成寺とは名つけたりや
 地 山寺のや 急舞 春の夕暮来て見
同上 入相の鐘に花を敷りける花
重頭有 敷りける花を敷りける カシシ 花
 まさるほとて寺々の鐘。月落ち鳥
 鳴て霜雪天は満ち潮ほとわく日高の

寺の江村の漁火。慈子對して人々
 眠れよき際そと立ち舞い様にて
 狙ひよりて撞かんとせし思へ
 この鐘根めしやとて龍頭よ手と
 掛け飛ぶとそんえし引まかつ
 まいてそ失せよける中入 狂言シカバク

口平
 言信道新がやうの義とあして

こそ。固く女人禁制の由申しては
曲事にてあるそ。あうなう皆々か
う後りる入での鐘は就いて女人禁
制と申しつる謂のゆと法ぬゆか
^{口平}らむ行もなせすゆ ^{口平}さらは其の
裾と語つて聞かせ申しゆへ ^{口平}懇に
御物語りゆへ ^{口平}昔この處よ。まかて

の庄司とさふ者あり。かの老入の
息女と持つ。又其の須臾より。徒野
へ年詣する。山伏のありし。かの庄司
かもとを宿坊と定めぬ。いつもかの
可に事なりぬ。庄司娘と寵愛のあま
りは。あの宿僧こそ。母かつまよま
よあんと。戯れと。幼心に真と思

ひ年日と送る。又或時かの客僧
店司か許に来りしに。かの女夜更
け人静まつて後。客僧の園に行
き。さしきて。わらなと。かくて。置ま
し。ゆそ。急まむ。か。鈴へと申し。か。入
客僧大まよ。騒ま。と。あらぬ。中。も
て。あ。夜に。鈴れ。思ひ。出。て。この

寺に。来。り。び。ら。よ。頼。む。よ。申。し。
か。は。隠。す。ま。前。あ。け。れ。つ。き。鐘。と。お
ろ。その。内。に。この。客。僧。と。隠。し。置。く。
さ。そ。かの。女。の。山。伏。と。遁。す。ま。よ。そ。
追。つ。か。く。る。お。り。や。し。日。高。山。の。水
汲。て。の。外。に。埒。り。し。か。の。山。の。上。下。と
か。あ。た。て。な。た。人。き。り。ま。り。し。か。念

の毒蛇となつて。口と口を易々と泳ぶ
越してこの寺に参り。さかかしてを
尋ねる。鐘の下りたるを怪め。龍
頭をくくり七まとい纏ひ。焰を出たし
尾をぬつて叩け。鐘の即ち傷と
なつて。終り山伏ととり終んぬ。あ
らう恐ろし。この物語にてゆそ

^口言語道断が。る恐ろし。ま御物語
こそゆつね ^口その時の女の執心
残つて。又この鐘は障碍をあす
とぬ。ゆ。われ人の行功も。やうの
ためあてて。そのゆへ。涯分祈つて。この
鐘を二度鐘樓へ上げ。うす。はてゆ
を ^口あ。へうゆ ^口水 ^口か ^口へ ^口つ ^口て ^口日 ^口高 ^口川

原の眞砂の教ハ盡くらも。行者
 の法力盡くへまか。皆一同に聲
 と上げ。東方に降三世明王。南
 方は軍荼利夜叉明王。西方は
 威德明王。北方は金剛夜叉明王。
 中央は日大聖不動。動かか動か
 ぬか索の。畏護三曼多。傳曰羅

南。旋多摩訶嚕遮那。安婆多那
 呼多羅吒干輪。聽我説者得大智
 慧。知我人者即身成佛。今今の
 蛇身と祈るとは。何の怨カ有明
 の撞鐘こそ。すはすは動くそ祈
 れた。すはすは動くそ祈れた。如
 引げや。手ん手ん千手の陀羅尼。

南無

不動の慈救の偈。明王の火焰の黒
 烟と立ててそ祈りける。祈り祈ら
 れ撞かぬところの鐘響き出て引
 かぬところの鐘躍るとそんえ。程
 かく鐘樓に引きよけたり。あれ
 見え蛇體は現れたり。祈せ
 謹請東方青龍清淨。謹請西方

白體白龍謹請中央黃體黃龍一
 大三千大千世界の恒沙の龍王哀
 愍納受哀愍志きんのみまんなかれ
 いつくは大蛇のあまへまそと祈り
 祈られかつともと轉ふか又起まゆつ
 て忽ち鐘又向つてつく息ハ猛
 火とあつてその身を焼く。日高の

門波深倒よおんてそ入りける
 望み足りぬと驗去達へわか本坊に
 そ帰りけるわか本坊よそ帰り
 ける

通前書

九終

龍 虎 概 説

内二十一卷ノ五

諸國一見の僧、唐土に渡り其山河の様を眺めける處に、不圖彼方の竹林に
 雲打ち蔽ひ、其氣色尋常ならざるにぞ、折柄來れる樵夫に何ぞと問へば、龍虎
 の戦ふなりとのことに、樵夫に導かれて彼の竹林に到り、龍攘虎撃の様を目の
 たりに見けり。

此曲前ハ関カニ後ハ勢ヲ付ケサリト描フベシ

役別		装束		季所	
ワキ	入唐ノ僧	角帽子 着附段熨斗目 又着流シ僧ニモ	水衣 白大口 腰帶 扇 数珠	季	所
ワキツレ	從僧二人	角帽子 着附無地熨斗目 又着流シ僧ニモ	縷水衣 白大口 腰帶 扇 数珠	不	唐
ツレ	男	着附無地熨斗目	浅黄縷水衣 紋付腰帶 扇	定	土
前シテ	樵夫 尉	面笑尉 朝倉尉ニモ 扇指ス 杖突ク	尉 髮 着附無地熨斗目 茶水衣 腰帶	曲柄	管古唄
後ツレ	龍	面黒髻 赤頭 龍ノ立物 蛇紋腰帶 打杖持ツ	赤地鉢巻 着附厚板 法被 半切	目番五	四
後シテ	虎	面獅子口 白頭 虎ノ立物 縫紋腰帶 切竹持ツ	金地鉢巻 着附厚板 法被 半切	能願畧	級

龍虎

小次郎光信作

ワキ僧
早シテ三人上
次才上
ヨウク
拍子ニ合

ワキ内サナリ

法の道に思ひ立つ法の道に思
ひ立つ。彼路遙け、まゝ船路かゝ
これの諸國一見の僧よてゐ。われ若
年の時よりも。諸國修行の志ある
みより。日の本とて残らずんば廻りて
ゆゑ又承り及びたる佛法流布の跡と

尋ね入唐渡天の望あつてその向の
 九州博多の津よみ所あよまき復船の
 舟向での春思ひ立ち渡唐仕りゆ
 道の三人上ササリ天の息八十鳩かけて僧ま出づる八
 十鳩かけて僧ま出づる船路の末も
 不知火の光榮と跡よあそそくは
 は續く雲の波震と分くら海原よ

又山んえて移もあくさや唐土は雲
 まよけりさや唐土は雲まよけり
 早河ササリあら嬉しやゆ遠々と思ひしに佛神
 の御加護もやありけん行進安穩よ
 布帆恙もあく渡唐仕りて心静
 子前ごと一見せさやとぬらけりや
 江霞浦と隔てく人煙遠く湖水天

子連あつて雁点遠あり。眺めやる遠
 おもその群竹の霞こめたる面白さ。
 又これある祖傳ひと山人のまうゆこの
 去と侍ち名前をも尋ねばやとぬじゆ
 折と得て春の薪よさす花の匂
 と運ぶ山おろし 谷の下庵遠ざと
 霞よ遠まおがめかな 五嶺蒼々

シテ射天上用カニ
 セツク
 拍子ニ合ズ

二人用カニ

といて雲化来す。たゞ憐む大妻
 萬株の梅梢も殊よ色深き。木
 陰よすれど心なまき。身もあをれ
 は右明のつれなき命あからへ
 て又廻り逢ふ春邊かな真よ
 知んぬ老も凡情少あまの有様と
 見ゆる度よ。愛る姿やます鏡。変

○小謡

上三のヤ

ヤ

三

る姿やます鏡移る月日の移も
 あく昨日は少年けみ白頭の雪
 とのみ積り積りて老が身の
 春の老はあたれどもわびしま
 業と柴取りて帰る山路の苦
 一さ又帰る山路の苦しま。

如何はこれある山人は尋ねやすま
早河ササリ

事のゆ 不思議やある別れやま
 奴御座ありいかさまはこれの唐の
 沙門をてしはぬゆか 早河ササリ げふまくは
 解いてゆものかなわれ日の本より
 この國は渡り佛法流布の古蹟
 と尋ねこれより渡天の志あるに
 よりの遠くを思ひ立ちて作 ミテ因カニ

○小謡

渡天の御シオンためかや。昔の聞きつ近
 きツカ号ルよ上は。者サ秘シかりケける街事カか
拍子合げツ又イ痛イをル。や遠がシ行ユ方ハも遠ま
タビ旅ビ夜ヨの立ち出で終ひし日ヒの本ホ
ワキ上の佛法トウ東ウ漸ゼンを少り捨て去り
シテ来キ。法ホウの蹟遠トホま昔諸シヨと今更マ
ワキよ誰か委しく何ぶづく夜
拍子合○星の

國ニ中ニと行く雲の星の國中ニと行
ク雲ノのどそくあらど人心ニせよ
ハチ胸ノ月ツキ余ヨイ而トの老と尋ねても何
ノかつせんまのあたり。見ると尋ね
ぬるをかなさよと尋ねるをか
なさよ。からる面白シの御春コそゆ
はねまづまづ尋ね申し度ま事

青房

四

のゆづんえ渡りたる山河の氣色行
 れも妙なる彫の中子あれは霞
 める遠おもとの向ひよんえたる
 竹林子。俄かよ雲のうらち掩ひ風凄
 しく吹きの落ちて。さあから氣疎
 きそのけしき。これはいかなる事
 やらん シテ用カニ げよ法不審の御理あの

竹林の岩洞の虎の栖めてゆと向ひ
 見えたる高山より。常々雲の

早かる上 ツヨク
 拍子合ハズ

掩ひつ。龍虎の戦あるものと
 不思議の事と聞くものかな音に
 圓まるとまのあたり。龍虎の辛み
 その方様と。さう見る事の不思議
 さふ シテ用カニ 畜類あれどもかくの如くその

勢とあらわして 行とあまのみ

○小謡 ^{ミテ} 勢の ^{上条同サラシ} 蝸牛の角のよふて

かたや何事と争は人の身も衰

らぬものせと世の中の習白あれど

や畜類の戦も事も理や戦ふ

事も理や尚々龍虎の戦の

者扱委しく御物諸り山へ引られ

○廿面独吟

生と受くる者其の身の威勢と

争ふ事人同もつてこれは同じ必

す龍虎は限るべからず御れば金

龍雲と穿ら猛虎深山は風と起す

何れも勢妙行て互の勢と争ふ

事畜類とりんども位高く雲居

又位めハ龍虎の故帝のは衣にも

これと織り殊な天子の御頼と龍顔
 と申し御系物と龍駕とも又名づ
 ひたり拍まきとて又虎のかりそめよ住む
 も千里の道もめて住み家と定むと
 か固より竹の真よして内の清まを
 我か友と頼むふ壽の影清く星雲らぬ
 法の道と知る。羅漢よはくなる又ぬ

四時の一つもあらはれけりとも聞く
 ものとも龍吟すれば雲起り虎嘯けは
 月生すと聞きてもまのあたりなる
 こそ不思議ありけれシニ上ノ申れぞ和國の
 物稽委しくあはもんト孫トの山
 陰の祖傳ひ竹の林にてかたある巖
 の陰よ立ち雲りて身と隠トん孫

へら。中、傾まぬ眼、まん。続み、榮
 の、薪と、腐、まうち、熟、けて、谷、の、下、道、
 家路とさして下りけり。○中人来序
 山路と分け、竹林と、遙、かよ、ん、渡、
 せば、煙、葉、朦、朧、として、夜、の、色、を、と
 拍子三合分

○切定難子
 侵す、風、技、蕭、々、として、秋、の、聲、より、
 凄、し、や、あれ、あれ、岩、より、雲、起、り、
 あれ、あれ、嶺、より、雲、起、り、
 降、くる、雨、の、音、
 輝、く、光、の、う、ち、
 の、難、逢、か、よ、金、前、目、も、肝、と、消、し、身、
 の、毛、も、よ、だ、つ、は、かり、
 上ニサラリ
 上カ返カク

龍虎

雲を竹林に覆ひ。かくて雲竹
 林に覆ひ。覆ひかゝるとんえつる
 竹林の巖洞に籠れる虎の現れ
 出づれば岩屋の内より悪風と吹き
 出だす。方より雲と吹き返す。敵と追
 手は勢ひ勇む。恐ろかりける。氣
 志きかあ。かりける。前より。かりける。

可よ金龍雲より下つて。悪虎
 と取らんと。籠んで。かり。籠籠の戦
 隙もあ。固より虎亂の勢。猛
 固より虎亂の勢。猛。左も去も。
 鉄の如く。又竹枝と折つて。金龍
 かれ。悪虎と巻かんと。覆ひかゝると
 背けて。追つ。め喰はんとすれば。

金龍雲居よ遠かよよれハ悪虎ハ
 焚か巖よより。遠かよえ送り無
 念のいまほひありと拂ひ又竹
 林よ薔びかり。また竹林よ薔び
 席つて。其のまゝ巖洞よ入りけ
 り。

大正拾年十月二十日印刷
 同 年十月廿五日發行

著作権
 許不惹煩



訂正著作者 廿四世 觀世元滋

發行兼 印刷者 檜 常之助

發行所 檜 大瓜

印刷所 江川堂

京都市神田區錦町一丁目拾番地
 京都市四谷區傳馬町貳丁目



終

